「特殊再生装置を要する音盤」パテー縦振動レコード

飯　島　　満
永井　美和子

はじめに

東京文化財研究所が所蔵するSPレコードの目録、東京国立文化財研究所編『音盤目録Ⅰ』（1966年刊）は、通常のレコードとは別に、「特殊再生装置を要する音盤」との項目を立てている。ここに分類されている音盤は、掲載順に「パテ」17枚（34面）と「ヒルモン」５本である。

後者の「ヒルモン」、すなわちフィルモン音帯については、昨年度の『無形文化遺産研究報告』第５号に成果の一部を掲載した（調査は継続中）。今年度はもう一つの「特殊再生装置を要する音盤」である「パテ」、フランス・パテ社から発売されたSPレコードについて報告する。今回の調査は、「演劇映像学連携研究拠点」早稲田大学演劇博物館との共同研究「日本における近代音源資料アーカイブ―蝋管以降の特殊音源を中心として―」の一環として行われたものである。

1.　出張録音フランス・パテー盤

パテ社の原語表記は「Pathé」である。その日本語表記は「パテ」「パテー」「パテエ」の３通りが行われてきた。近年の文献では、実際の発音により近い「パテ」を用いることが多いようである。本報告では、東京文化財研究所の所蔵音盤レーベルに「仏国巴黎市パテー会社製」と刻まれていることから（後述）、これを当時の日本語での商標名表記とみなし、日本吹込みの音盤を指す場合には、その呼称を「パテー」で統一することとした。なお、資料の翻字や引用に際しては、表記の一部を通行の字体に改めている。

東京文化財研究所蔵のパテー盤は全てが11インチの平円盤である。見た目には他社のレコードとなんら違いはない。にもかかわらず「特殊再生装置を要する」のは、音溝が縦振動で刻まれているからである。

レコードは音溝に刻まれた振動をレコード針を通して音声に変換する。音声振動を音溝として成形するには、２種類の方式があった。レコード面に対して、振動を水平に刻む方式（横振動）と、垂直に刻む方式（縦振動）である。平円盤開発初期、レコードを大量生産する上で扱いやすかったのは、縦振動よりも横振動であったといわれている。収録対象の音量（振動の振幅の大小）にかかわらず、横振動ならば音溝の深さが一定に保たれているからである。実際に、大多数のレコード会社が採用したのは横振動であった。ところが、発明者であるエジソンのシリンダー（蝋管）が縦振動方式だったため、平円盤レコードの量産が始まった当初は、旧来の縦振動技術を応用してレコード制作を続けた

会社もあった。フランス・パテ社はそうしたレコード会社の一つだったのである。縦振動の平円盤を生産していた会社は少数派であり、最終的には、横振動レコードに駆逐され、縦振動レコードは生産されなくなってしまう。第2次大戦後、急速に普及したLPレコードやEPレコードも横振動レコードである。

いうまでもなく、横振動と縦振動のレコードに再生機の互換性はなかった。横振動が主流になってから以降、パテ社は縦振動だけでなく横振動にも対応できる兼用の再生機を生産するようになる。しかし、縦振動レコードは一般に流通する大多数の再生機では聴くことができなかった。レコード針さえもが、通常のものは当時のパテ社製レコードの再生に適していなかった。そうした状況は今も変わらない。今回の調査に際しても、収録内容を確認するには、縦振動レコードの再生が可能な蓄音機[1)]が必要であった。

贅言ながら、当時のパテ社のレコードはセンタースタート・ディスク（Center Start Disque）であった。レコード針が、音盤の内側から外に向かって再生するレコードである。多くのレコード会社では、レコード針が音盤の外側から内側に向うリムスタート・ディスク（Rim Start Disque）を生産していた。その意味でも、パテ社のSPは異色である。もっとも、センタースタートとリムスタートは再生装置を選ばない。事実、センタースタートの横振動レコードも存在する。センタースタートであることはパテー盤の特徴ではあっても、「特殊再生装置を要する」規格ではない。

本報告で対象となるパテ社のSPは、所謂「出張録音盤」である。

日本での出張録音は、６社（４か国）によって行われたことが知られている。吹込みを実施した年次順に並べると、以下のようになる。

グラモフォン（イギリス）	明治36年
コロムビア（アメリカ）	明治36年・明治38年・明治39年
ベカ（ドイツ）	明治39年
ビクター（アメリカ）	明治40年・明治44年・大正５年
ライロフォン（ドイツ）	明治42年・明治43年・明治44年
パテ（フランス）	明治44年

６社の中で最後に日本のレコード市場に参入したのがパテ社であった。ただし、パテー盤の録音年に関しては、同時代資料に拠る裏付けが得られていない。たとえば、広範な分野から数多くの資料が集積されている倉田喜弘『日本レコード文化史』（参考文献［倉田1979］）には、そもそもパテ社の出張録音にまつわる記事が皆無なのである。最新の研究成果としては、簡潔かつ明晰に事実関係をまとめあげている郡修彦「日本のSPレコード史」（参考文献［郡2007］）がある。そこでも、出張録音を行った会社の一つとしてパテ社に言及するだけで、慎重に録音年までは触れていない。

吹込みを明治44年（1911）と明記している文献としては、昭和15年（1940）刊『珍品レコード』所収の山口亀之助「邦楽盤懐古録」（参考文献［山口1940］）が古いようである。山口亀之助自身は参考文献［山口1936］で「パテーが日本市場を窺窺して居たのは、久しい以前からでその準備工作とし

て、明治四十三年七月二十二日に三種の商標の登録を完了した」と記している。録音年を明治44年とする根拠は、あるいはこの辺りにあったのかも知れない。

なお、パテ社が明治43年（1911）７月に３種類の商標を登録していたことは、参考文献［商標1911］の記載に拠り確実である。ただし、［山口1936］の登録日には一部誤りがある。［商標1911］の日付は７月27日であり、また「蓄音機の平円盤」に対する商標の表記を、第32342号「DISQUES-PATHE」[2]としている。

一方、明治44年という年は、パテ社の吹込みに参加した演奏者の活躍期間からは、録音年として溯りうる上限となる。杵屋喜三郎の長唄、杵屋六左衛門の三味線によるパテー盤、製品番号34633が現存する（図版１参照）。喜三郎とは明治44年４月に襲名した14代目である（六左衛門は明治27年５月襲名の13代目）。杵屋喜三郎とレコードレーベルに明記されている以上、パテ社による録音作業の全てが完了した日時は、どんなに早くても明治44年４月以降であることは確実である。

図版１：東京文化財研究所蔵フランス・パテー盤
製品番号 34633「筑摩川」

問題は、［山口1940］に記された出張録音の収録年には、一部に誤りのあることが判明している点である。パテ社の録音年についても、やはり盲信は謹むべきなのであろう。とはいえ、［山口1940］は言語道断な誤謬だらけの文献などではなく、今なお有益な情報に富む資料なのである。商標の登録年と同様、何らかの根拠にもとづく発言であった可能性も、同時に否定できない。パテー日本吹込み盤の録音年に関しては、現状では、確証は得られてはいないながらも、参考文献［岡田1988］のように「明治四十四年に行われたと伝えられている」とするよりほかないように思われる。

出張録音盤は、日本国内では輸入代理店を通じて販売されていた。パテ社の代理店に関わる情報もまた、ほとんど第１次資料に溯ることができない。［山口1936］に拠れば、「フワーブル・ブルブランド商会」が代理店であり、「大阪川口町（居留地）十番館と東京築地明石町六番館とで古くから時計の輸入で老舗を取り、傍ら対馬で鉱山を経営して居た」とする。この「フワーブル・ブルブランド商会」[3]とは、スイス人ファブルブラント（James Favre-Brandt、1841-1923）が元治元年（1864）頃に横浜に創設した貿易商館のことであろう。

ファブルブラントは幕末から活躍していた大貿易商であり、その閲歴や日本で行ってきた事業については、平野光男「ゼエームス・ファアブルブランド伝」（参考文献［平野1957］）が詳しい。それによれば、大阪支店の開設は明治元年（1868）であったという。東京支店については記載がないものの、［平野1957］記載の大阪支店の住所は［山口1936］と一致する。東京支店の情報も正しかった可能性がある。

鉱山の経営については、［平野1957］は次のように記している。

> 明治三十四、五年頃以来、亜鉛鉱山の経営にも乗り出して成功を収めている。これは原鉱のままベルギーへ輸出したもので、その鉱区は北海道から青森・山形・富山・岐阜・福井・淡路島・鳥取・島根・対馬等に及んでいる。

鉱山を経営していた場所は、対馬だけではなかったにしろ、事実だったようである。残念ながら、ファブルブラント側の文献からもパテー盤との繋がりは見えてこない。日本各地で鉱山経営にも携わっていたファブルブラント商館の規模を念頭に置くと（幕末には薩摩藩に対して大量の武器調達に応じていたという［平野1957］）、仮に取り扱っていたのだとしても、数多ある輸入品の一つに過ぎなかったのではあるまいか。一方で［山口1936］には、「天賞堂とタイアツプして発売した」との記述もある。天賞堂は米コロムビア盤の輸入販売を手掛けていたことで知られている（参照［倉田1979］）。ことによると、ファブルブラント商館の役割は輸入取次だけで、販売は天賞堂が引き受けていたということなのかもしれない。

パテー日本吹込み盤は、営業的には失敗に終わったものと考えられている。パテ社が進出してきた明治43年当時、すでに日本では他社の音盤が市場に流通していた。国内でのSP生産も明治42年（1909）に始まっている。いうまでもなく、いずれもが横振動方式のレコードであった。パテー盤を購入するとなると、同時に縦振動用の再生機を購入しなければならなかった[4)]。出張録音の歴史の中でも後半期に輸入されたパテー盤は、［山口1940］での表現を借りれば「独特の装置の機構をもつてしなければ、再生蘇音が絶対的に不可能である厄介な代物」だったのである。

パテー盤の末路を［山口1936］は「日本代理店のフワーブルも在庫品をすつかりニツポノホンに委托して、対馬国下県郡佐須村大字小茂田九十番地へ都落した」と記す。ファブルブラント商館が輸入レコード事業の失敗程度で大打撃を受けたとは考えにくい。「都落」のあたり、とりわけ真偽のほどは怪しいものである。ただ、在庫品の委託が、ニッポノホンの後身であるコロムビアではなく、厳密な意味においてニッポノホン（日本蓄音機商会）に対して行われていたのだとすれば、それは昭和初年以前の出来事だったはずである[5)]。［山口1936］の記事が、必ずしも正確ではなかったにせよ、事実の一端は伝えていたものと信ずるならば、パテー日本吹込み盤が商品として正規に流通していた時期は、長くても大正年間（1912-1926）を中心とする10数年程だったことになる。

ファブルブラントが歿したのは大正12年（1923）８月であった。その直後、同年９月の関東大震災で、幕末に建設された横浜の商館[6)]が倒壊する。晩年のファブルブラントは４人の息子に商館の経営をまかせるようになっており、参考文献［三宅1990］に拠れば、震災後は被災を免れた横浜の自宅と大阪支店で営業が行われ、商社としては戦前まで存続していたのだという。ファブルブラント商館によるパテー盤の在庫放出が事実とすれば、ファブルブラント本人の死去や震災も影響していたといえるのではなかろうか。

3.　パテー日本吹込み盤

1911年パテー日本吹込み盤は、現存数が極めて少ないようである。［山口1936］はニッポノホンに在庫品が委託されてから後の状況について、「パテーレコードの処分品は転々として市場をさまよつた。その一部のものが好事家と蒐集家の目にとまつて感激を催ふさせた事もある」と記している。これが昭和11年当時の実感だったとなると、戦禍を被った今日では、現存数はさらに減少しているのではないかと想像される。

発売目録についても、今のところ出張録音盤の中でパテー盤のみ、現存の報告がなされていない（参照［岡田1988］）。どのような演目が吹込まれていたのか、何種類の日本吹込みが制作されていたのか、その詳細は明らかではないのである。［山口1940］も、「パテー盤を所蔵しておられる向きは極めて少く、自分が東京・大阪の個人コレクションに就いて調査した結果、貧弱なルポルタージュしか出来ない始末である」と報告し、わずか14枚を紹介するにとどまっている。

また、東京文化財研究所から刊行されてきたSPレコードの目録も、パテー盤などの特殊なレコードに対し、別枠を設けて分類を施したのは『音盤目録Ⅰ』だけであった。東京文化財研究所で所蔵するパテー盤の全貌は、目録が存在しながらも、実際には把握し易いものではなかったのである。改めて調査を行い、その成果を公表することにした所以である。

調査の結果、両面盤で40枚（１枚重複しているので異なりとしては39種類）の所蔵が確認できた。この中には、未整理のレコードであったため、これまで目録等で所蔵を公表していなかった３枚が含まれている。今回の調査で確認できた事柄もあわせ、まずは所蔵音盤を概観しておくことにする。

図版２：東京文化財研究所蔵フランス・パテー盤
製品番号 34650「綱館（其壱）」

パテー日本吹込み盤の特徴として、これまでも必ず取り上げられてきたのが、レコード中央のレーベルである。曲目や演奏者等々は、紙に印刷されたものを貼付しているのではない。盤面に文字を彫り込み、その陰刻部分を黄色い塗料で彩色しているのである（カラー図版参照）。エッチングレーベルとの呼称もあるらしい。おそらくフランス本国の担当者が、日本人が書いた原稿か覚書きを手本にして彫り込んだのであろう。誤記ともいいかねる幼児が書いたような文字は、今日の目からは却って面白く、新鮮にうつる。

レーベルの中央には、所蔵するパテー盤に例外なく、右からの横書きで「仏国巴黎市パテー会社製」と彫られている。曲名と演奏者名は、レーベル上半分もしくは下半分のどちらかに置かれてお

り、その残りの半分が製品番号を表示する領域となっている。例えば、先の図版１は上半分に、図版２（製品番号34650）は下半分に曲名と演奏者名が配されている。

なお、レーベル下半分に曲名と演奏者名が配されるような場合、大概が縦書きで彫り込まれていた。図版２のように演奏者の字数が増えると、縦書きではあっても、多くの盤で文字配りが横に揃ってしまっているというのが、何ともご愛嬌である。

パテー盤は「日本大阪」「日本東京」と２種に分類することもできる。これは今回の調査で明らかになった事柄の一つである。図版１では演奏者名の下に、図版２では曲名の左隣に「日本東京」とある。図版３（製品番号34510）がパテー「日本大阪」盤である。図版４のパテー盤は、その表面となる製品番号34646「松のみどり（其壱）」に「日本東京」とある。

その意味するところは、判然としない。前述したように、［山口1936］に拠れば、パテー盤を扱うファブルブラント商館の支店は大阪と東京にあったという。当面は、その支店名を示すものと考えておくことにする。ただし、仮にファブルブラント商館の取扱い支店名を示すものであったとするならば、パテ社が日本に技術者を派遣して行った録音作業（原盤作成）の段階から、何らかの関与があったものとみなさねばならない。この点に関しては資料があまりに不十分であり、推論も憚られる段階にある。支店名というのは、あくまでも仮の措置である。もう一つの可能性として考えられるのは、録音場所であろうか。この件については、本稿で再度検討することにしたい。

図版３：東京文化財研究所蔵フランス・パテー盤
製品番号 34510「勧進帳（第壹）」

図版４：東京文化財研究所蔵フランス・パテー盤
製品番号 34647「松のみどり（其貳）」

パテー盤は製品番号にも際立った特色がある。大概は同じ番号が3種類の異なった数字で彫られているのである。製品番号領域の中央には、商標「DISQUE PATHÉ」が刻まれており、左端に洋数字で製品番号が配されている。これは、東京文化財研究所の全てのパテー盤に共通する。

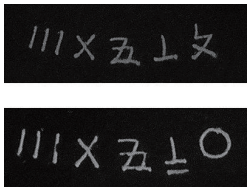
図版１と図版３では、商標に並行して製品番号が漢数字（右からの横書き）で記されている。漢数字に関しては、図版２のように彫られていない盤もある。また、一部の盤では漢数字の製品番号が、

陰刻ではなく陽刻になっていた。そうした音盤では、凸部分に彩色が施されている。

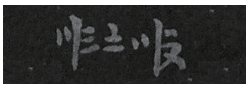
製品番号領域の右端、図版１で使われているのはペルシア数字である（裏面も同様）。ただし、ペルシア数字の使用は、所蔵パテー盤では２枚だけであった。参考までに、もう１枚についても図版４（製品番号34647）として掲出しておく。

図版１と図版４に掲出したものを除く所蔵パテー盤では、製品番号領域の右端で、あまり見かけたことのないような数字が使われている。１から３はローマ数字に似ているが、横置きされることもある（カラー図版参照）。横置きされると、さながら漢数字である。

図版５は既出のパテー盤とは別の盤面から、該当箇所のみを抜き出したものである。上から「34569」と「34570」である。「７」は郵便番号記号「〒」を逆さにしたような形をしている。この下にもう１本線が加わると「８」となる。また、４・５・９・０以外は算木の表記法に類似している。今のところ、何数字と呼ぶべきなのかは判明していない。



図版５：パテー盤の製品番号



図版６：上海百代公司盤の製品番号

実は、中国本土で発売されていたパテ社のレコード「上海百代公司唱片」にも、この数字が毛筆体のような別の意匠で使われていた。図版６は東京文化財研究所が所蔵する唯一の上海百代公司盤（縦振動）、製品番号「33739」梅蘭芳『洛神』である。漢字文化圏で用いられた数字であるのは、ほぼ間違いなさそうである。

図版７：東京文化財研究所蔵フランス・パテー盤
製品番号 34567「野崎村之切」

製造番号はレーベル枠の外に刻印されている。位置としては、レーベルの底のさらに下となる。レーベル枠からはずれているためか、塗料が乗っていないものが多々あり、画像にすると数字が見えにくい。比較的判読しやすい例として、図版７（製品番号34567・製造番号79655-RA）を掲出した。

当時のSPレコードの常として、レーベルの直径は一定していない。大きいもので約９cm、小さいもので約８cmである。先に触れたように、パテー盤の直径は11インチであった。ところが再生時間

は概して約３分であり、最も一般的なSPレコードである10インチ盤と大差ない。これは、当時のパテ社のレコードの回転数が、１分間に90回転から100回転（多くの10インチ盤は78回転もしくは80回転）に設定されていたためである（参照［三浦2006］）。

4.　東京文化財研究所蔵フランス・パテー音盤（１）

東京文化財研究所蔵パテー日本吹込み盤40枚の「所蔵一覧」（85頁参照）は、次のような書式で作成してある。

製品番号〈製造番号〉　　曲名　　演奏者名　　支店名　　【整理番号】

製品番号の前、「所蔵一覧」欄外の亀甲括弧〔　〕は、何種類のパテー盤を確認することができるのか、それを示すためにSP １枚の異なりごとに付した仮の通し番号である。所蔵盤で重複しているはパテー盤〔28〕、長唄『吉原雀』の１枚目である。

製品番号から支店名までの各項目は、盤面に記された情報をもとにしている。

全体の配列は、原則として音盤の製品番号順とした。ただし、これはパテー盤に限った事態ではないのだが、それぞれの盤面ごとに別の番号が割り振られている上に、レコードの表面と裏面とで連番になっていないこともある。そのため、一部で製品番号の順が前後している。

さらに、録音内容の前後が製品番号の順序とは逆になっていることもある。例えば、パテー〔13〕では製品番号34565が「新口村之段（第壹）」、製品番号34559が「新口村之段（第貳）」である。製品番号順にすると、レーベル記載が前後してしまう。こうした場合は、製品番号ではなく、録音内容を優先させることとした。なお、パテー盤の製造番号は、製品番号とほとんど連動していない。

曲名と演奏者名は、日本語を理解していないことによる明らかな誤記を訂正した以外は、可能な限りレーベルの表示を尊重している。修正しなかった箇所については、ママ記号としてアステリスク「*」を付してある。少し注釈を加えておきたい。例えば、パテー〔７〕製品番号34529の「小信」は「堀江小信」、パテー盤〔８〕製品番号34533の「つま」は「堀江つま」であることが、前後のレーベル記載に拠って容易に推測できる。そうした場合であっても、敢えて文字情報の付加はせず、ママ記号を付している。パテー〔38〕と〔39〕の「吾妻路宮古」も同様である。

また、パテー盤〔33〕製品番号34650は収録内容から「綱館（其壱）」ではなく「綱館（其参）」でなければおかしい。訂正しなかったのは、和文表記を理解していないことによる誤記とは判断し難いと考えたからである。パテー〔28〕の製品番号24643「綱館（其壱）」も同様である。ただし、『吉原雀』に関しては、録音内容とレーベルの齟齬が複雑で、説明も非常に厄介なものとなる。詳細は後述することにしたい。

末尾の整理番号は、東京文化財研究所のレコード所蔵目録『音盤目録』他でも用いられている当研究所での登録番号である。目録未掲載である３枚、パテー〔７〕〔８〕〔18〕については、「Z」で始まる仮番号を付してある。

本報告書の「所蔵一覧」に掲出した以外にも、製品番号等は判明していながら、現物が確認できないパテー盤がある。次に列挙する。配列は「所蔵一覧」と同じく製品番号順である。曲名・演奏者名は、基本的に各情報の出典の表記に従っている。便宜上「所蔵一覧」に続く通し番号〔　〕を振っておくことにした。

〔40〕	34501	君が代	大阪第４師団軍楽隊
	34512	凱旋軍歌行進	〃
〔40〕	34518	三勝酒屋（一）	豊竹呂昇
	34519	三勝酒屋（二）	〃
〔41〕	34528	推量節	堀江つま
	未詳	木津節	〃
〔42〕	34541	壺阪万才唄	豊沢猿次郎・野沢吉作
	34571	廿四孝狐火	〃
〔43〕	34560	三勝酒屋（一）	貴若・豊沢小住
	34561	三勝酒屋（二）	〃
〔44〕	34563	廿四孝	貴若・豊沢小住
	34566	太功記	〃
〔45〕	34654	妾馬（一）	三遊亭小円朝
	34655	妾馬（二）	〃
〔46〕	34656	壺阪	竹本綴太夫・竹沢団六
	34657	堀川	〃
〔47〕	34660	御所桜	竹本綴太夫・竹沢団六
	未詳	（都々逸）	立花屋小美代
〔48〕	34664	日吉丸	竹本綴太夫・竹沢団六
	未詳	未詳	未詳

やや煩瑣にはなるが、典拠を明示しておきたい。

この中で現存が確認されているのは、ヴォイス・ミュージアム（富山県）所蔵のパテー〔40〕のみである。まだ現物は確認していない。製品番号等の情報は、参考文献［志甫2008］に拠る。

パテー〔46〕三遊亭小円朝の落語『妾馬』は、東京文化財研究所蔵『藤根道雄レコード目録』（以下『藤根目録』）記載の情報である。記されているのは、演目と製品番号「34654,5」だけである。明記されてはいないのだが、表面と裏面の１枚で『妾馬』が録音されていたものと考えられている。

近世邦楽研究者であった藤根道雄（1899-1972）と東京文化財研究所の所蔵音盤（竹内道敬コレクション）との関係については、報告書で言及したことがある[7)]。『藤根目録』は、いわゆる「所蔵目録」ではなく、存在を把握していたSPレコードを分類して目録化したある種のディスコグラフィーである。ちなみに、これまで目録未掲載であったパテー盤３枚は竹内道敬コレクションの一部であ

り、これらに関しては藤根道雄旧蔵SPであった可能性がある。

パテー〔42〕は参考文献［岡田1988］記載の情報であり、「推量節」裏面の「木津節」については製品番号を「34529」としている。しかしながら、この番号はパテー〔７〕と重複する。本報告では製品番号未詳としておくことにした。いうまでもなく、どちらもが正しい（同一番号が別のレコードに誤って記されていた）可能性もある。［岡田1988］には、他にも「浪花節の京山駒吉（後の八州東天）が確認されている」との記事がある。ただし、製品番号および収録演目の情報を欠くため、上記の一覧からは省いている。

残る現存未確認のパテー盤7枚は、東京文化財研究所蔵『安原レコード覚書』（以下『安原覚書』）記載の情報である。安原仙三（1903-1955）は、義太夫節を中心とするSPレコードの収集家として知られている。東京文化財研究所が所蔵するパテー盤も、仮番号を付した３枚を除き、安原仙三の旧蔵品である。

『安原覚書』も、『藤根目録』と同様に所蔵目録ではない。一個人が作成したディスコグラフィーであり、これまでにも何度か報告書で引用言及してきた資料である[8)]。

現存未確認のパテー盤に関する情報は、〔42〕の片面を除けば、現存するパテー盤と製品番号の衝突がない。いずれも信用に足る内容といえるだろう。

以上が、現時点で報告者が把握しているパテー日本吹込み盤の全容となる。

前述したように、パテー盤は何種類が発売されていたのかが判明してない。現状では、手許にある資料から想像するよりほか術がない。

現物未確認盤も含め、製品番号が最も小さいのがパテー〔40〕の34501、最も大きいのがパテー〔39〕の34677である。面数にして差引き177、パテー盤は両面盤であったから全面数は偶数にならなければおかしい。製品番号34501と34677の間に少なくとも１面分の欠番があるか、さもなければ少なくとも１面分の未確認盤、すなわち製品番号34678が存在するかのいずれかである。欠番ではなく、未確認盤が存在すると仮定して枚数に換算すると89となる。製品番号34501から製品番号34677（および未確認盤34678）、この間に位置するパテ社のSPが全て日本吹込みであり、さらに加えて欠番もなかったと仮定すると、最低でも89種類のパテー盤が制作されていたと考えることができる。

製品番号34501以前、および34677以後のパテー盤については、今後の調査を俟つことになる。しかしながら、大正年間には流通していたものと想定される89種類のパテー盤の内、半数以上については録音演目と演奏者がほぼ判明しており、そして半数近くについては収録内容を実際の再生音で確認することができるのである。89種類という数が全パテー日本吹込み盤の何割を占めるのかは、依然として明らかではないものの、東京文化財研究所に所蔵されている40枚（39種類）は、実数から受ける印象以上に大部なコレクションであったといえるのだろう。

5.　東京文化財研究所蔵フランス・パテー音盤（２）

先にも触れたように、パテー日本吹込み盤は「日本大阪」盤と「日本東京」盤に分類できる。製品番号順に並べると、所蔵40枚の内ではパテー〔９〕１枚を除いて、前半16枚が「日本大阪」盤であ

る。つまり、製品番号34500番台が「日本大阪」、34600番台からが「日本東京」となるらしい。製造番号も、これまたパテー〔９〕を例外として、79000番台までが「日本大阪」盤、80000番台からが「日本東京」盤と画然としている。しかしながら、事実として確認できるのはここまでである。いくつかの推論をたてることはできても、結局のところは確証を欠いた「かも知れない」の堂々巡りとならざるを得ない。

たとえば、「日本東京」は、所蔵盤の大半が長唄である。しかも、パテー〔38〕〔39〕は新内であった。竹本錣太夫と竹沢団六の録音、パテー〔35〕〔37〕さえ無ければ、収録場所を示しているのではなかろうかと考えたくなる。５代目錣太夫（1876-1940）と６代目団六（後の６代目鶴沢寛治、1887-1974）は人形浄瑠璃の太夫と三味線弾きであり、大阪を本拠地とする芸人だからである。さすれば、この二人が東上していた時期の録音であったがゆえに、「日本東京」盤となったのではないかと考えられなくもない。明治44年４月前後、錣太夫と団六の東京での活動が判明すれば、あるいは収録時期を絞り込めるのかも知れない。

その一方で、「日本東京」が東京での録音を示していると解釈するならば、当然「日本大阪」盤は大阪での録音となる。録音用のスタジオすら十分に整備されていなかったであろう時期に、わざわざ東京と大阪で録音作業（原盤作成）をする必要があったのか疑問は残る。

当時の状況から、パテー盤の収録は大阪で行われていたと考えることもできる。東京文化財研究所蔵パテー盤の録音に参加している出演者の相当数が、大阪に集結している時期を特定できるからである。明治44年10月である。以下、大阪での興行記録は国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表　大阪篇』（八木書店）に拠る。

女流義太夫の豊竹呂昇（1874-1930）、現存未確認盤の１枚を加えるとパテー盤５枚（10面）に録音をのこしている。呂昇は、明治44年10月１日から11日、大阪明楽座に出演していた。

同年10月17日から23日、大阪浪花座では「長唄大会」が開催されていた。杵屋喜三郎襲名披露興行で、先に触れた13代目杵屋六左衛門や14代目杵屋喜三郎の他に、パテー盤の長唄11枚（22面）の主要な演奏者、６代目芳村伊十郎（1858-1935）、８代目岡安南甫（1874-1915）、５代目杵屋勘五郎（1875-1917）の全員が顔をそろえていた。同じく浪花座「長唄大会」で名を連ねている「千代」「ゑい」は、パテー盤３枚（６面）で長唄『新曲浦島』を録音した杵屋千代と杵屋栄子であろう。

現存未確認盤を含めると６枚（12面）に録音をのこした貴若（生没年未詳）は、大阪では素人浄瑠璃界の重鎮であった[9)]。貴若も同年10月28日、大阪天満座「素人浄瑠璃大会」に出演している。

なお、大阪を本拠地とする芸人としては、先の５代目竹本錣太夫と６代目竹沢団六の他に、やはり人形浄瑠璃の三味線弾きである２代目豊沢猿二郎（レーベル表記では「猿次郎」後の４代目豊沢仙糸、1876-1946）、３代目野沢吉作（1884-歿年未詳）がいる[10)]。他にもパテー〔１〕〔２〕〔40〕の第4師団軍楽隊、所在地は大阪である。

豊竹呂昇、貴若、杵屋六左衛門らの動向は、パテー日本吹込みを明治44年10月の大阪とする確証にはならない。有力な状況証拠というべきであろう。とはいえ、明治44年10月の大阪であれば、現存するパテー盤の内25枚（50面）の録音が確実に可能だったのである。その内の14枚は「日本東京」盤であった。これは、レーベル表記「日本東京」が録音場所を示すものではないという可能性も、決して

低くないことを意味する。

パテー日本吹込み盤には「日本大阪」盤と「日本東京」盤が存在する。それが何を意味するのかについては、納得できる説明ができない。大方のご教示を仰ぐことにしたい。

もう一つ、面倒な問題がある。長唄『吉原雀』である。

前述のように、パテー〔28〕から〔30〕は、レーベル表記に誤りがある上に、収録内容との間に一部齟齬がある。レーベル表記と収録内容の対応は以下の通りである。

	製品番号	レーベル表記	収録内容
〔28〕	34640	吉原雀（其壱）	吉原雀（１）
	34641	吉原雀（其貳）	綱館（４）
〔29〕	34642	吉原雀（其三）	吉原雀（３）
	34643	綱館（其壱）	吉原雀（４）
〔30〕	34644	吉原雀（其五）	吉原雀（５）
	34645	吉原雀（其六）	吉原雀（６）

現時点で報告者は、次のように解釈している。

製品番号34643はレーベルを彫った時点での単純な誤りである。製品番号34641の収録内容は『吉原雀』ではなく『綱館』の一部となっている。収録されている箇所は、製品番号34651「綱館（其四）」に等しい。録音内容を、あえて「綱館（４）」としたのは、それゆえである。製品番号34641と34651は、収録箇所が同じであっても製造番号が異なっていることから、両者は同一演奏者による別テイクと考えられる。したがって、製品番号34641の唄方は芳村伊十郎である。

岡安南甫によるパテー盤『吉原雀』は、おそらく全３枚（６面）で収録されていたのであろう。レコードを制作する工程の、どの段階であったのかは想像するほかないが、本来「吉原雀（其貳）」であった原盤が、芳村伊十郎「綱館（其四）」の別テイクと入れ違ってしまったのであろう。岡安南甫によるパテー盤「吉原雀（其貳）」は、もはや永遠に失われてしまったということになるのではあるまいか。パテー盤は片面３分程であり、そもそも『吉原雀』の全曲が録音されたわけではない。そうではあっても、完品で揃えることができないのは、やはり遺憾なことであったとせねばならないように思われる。

おわりに

1911年パテー日本吹込み盤は、不明な点が多い。現段階では、録音年すら「伝えられている」としなければならない始末である。いま少し時間をかけて調査すべきだったのかもしれない。

しかしながら、いささか拙速の誹りを受けるのを覚悟で、このような報告をすることに決したのは、参照すべき資料のあまりの少なさに、たとえ不備だらけではあっても、パテー盤の所蔵機関として情報を提供することには、それなりの意味があるのではないかと考えたからにほかならない。

諸賢のご教示を仰ぐ次第である。

《謝辞》

本報告をまとめるにあたっては、多くの方々より、ご協力やご教示を賜りました（敬称略）。

磯貝建文、大西秀紀、岡田則夫、鈴木道夫、八重樫素久、綿田稔

記して、お礼を申し上げます。

《注》

1）Brunswick~Model-101（アメリカ・ブランズウィック社1920年頃）。株式会社シェルマン所蔵。

2）参考文献［商標1911］で確認した限りにおいて、登録した商標は「DISQUES-PATHE」。末尾の「E」にアクサンティギュ（accent aigu）が見えないのは印刷上の問題かもしれない。ただし、パテー日本吹込み盤に彫られた商標は「DISQUE PATHÉ」であり、前半部分が「DISQUES」ではない。

3）山口亀之助は［山口1940］では「代理店　大阪　ファーブル・ブラント商会」としている。

4）パテ社が縦振動・横振動のSP両用の再生機を生産したのは1920年代に入ってからのようである。参考文献［三浦2004］参照。

5）日本蓄音器商会が英国コロムビアと資本提携したのが昭和２年（1927）、日本コロムビアの創立が昭和３年（1928）。［倉田1979］参照。

6）最初に建設された商館は慶応２年（1866）11月の火災で類焼するが、ただちに再建され、慶応３年（1867）２月頃には新たな商館が竣工されていたという。［平野1957］参照。

7）拙稿「国立音楽大学附属図書館寄贈　竹内道敬旧蔵音盤目録（３）」、『無形文化遺産研究報告』３（2009年３月）。

8）拙稿「二代目鶴沢清八『義太夫　名人の型』―「明治文楽」追懐―」、『芸能の科学』32（2005年３月）。拙稿「吉田兵次「とやぶれ」」、『無形文化遺産研究報告』１（2007年３月）。『安原レコード覚書』には様々に興味深い情報が含まれている。将来的には画像での公開を検討している。

9）明治44年6月、南地演舞場での素人浄瑠璃の会「第十四回　幼声会」で貴若は審査員をつとめている。また、東京文化財研究所藏のSP、ライロフォン70351「明烏」のレーベルには「大阪素人名人」と記されている。

10）豊沢猿二郎と野沢吉作は、明治44年10月の出演記録は不明ながら、『義太夫年表　明治篇』に拠れば、明治44年５月は大阪堀江座に、翌45年１月は大阪近松座に出勤している。

《参考文献》

［商標1911］『日本登録商標大全　第３輯第18類』　東京書院　1911年７月

［山口1936］山口亀之助『レコード文化発達史　明治大正時代初篇』　録音文献協会　1936年４月

［山口1940］山口亀之助「邦楽盤懐古録」『珍品レコード』　グラモヒル出版部　1940年５月

［平野1957］平野光雄『明治前期東京時計産業の功労者たち』
「明治前期東京時計産業の功労者たち」刊行会　1957年６月

［倉田1979］倉田喜弘『日本レコード文化史』　東京書籍　1979年３月

［岡田1988］岡田則夫「明治時代の出張録音レコード」
『近代庶民生活誌　第８巻　遊戯・娯楽』三一書房　1988年３月

［三宅1990］三宅宏司「C.&J.Favre Brandt 銘の望遠鏡」
『理科中央研究室年報　15』大阪教育大学　1990年12月

［三浦2006］三浦玄樹『図説世界の蓄音機』　星雲社　2006年７月

［郡2007］郡修彦「日本のSPレコード史」
『音楽研究　第22巻』大阪音楽大学音楽博物館年報　2007年３月

［志甫2008］志甫哲夫『SPレコード　そのかぎりない魅惑の世界』ショパン　2008年12月

飯島　　満（東京文化財研究所無形文化遺産部）

永井美和子（早稲田大学演劇博物館）

東京文化財研究所　出張録音フランス・パテー　所蔵一覧

	製品番号〈製造番号〉	曲名	演奏者名	支店名	【整理番号】
〔1〕	34510 〈79725-RA〉	勧進帳（第壹）	第四師団軍楽隊	日本大阪	【18-002A】
	34513 〈79767-RA〉	勧進帳（第貳）	〃	日本大阪	【18-002B】
〔2〕	34511 〈79709-RA〉	越後獅子	第四師団軍楽隊	日本大阪	【18-001A】
	34514 〈79766-RA〉	鶴亀	〃	日本大阪	【18-001B】
〔3〕	34515 〈79764-RA〉	浄瑠璃　太功記十段目	豊竹呂昇	日本大阪	【17-127A】
	34516 〈79984-RA〉	浄瑠璃　お俊伝兵衛堀川之段	〃	日本大阪	【17-127B】
〔4〕	34517 〈79090-RA〉	浄瑠璃　新口村之段	豊竹呂昇	日本大阪	【17-128B】
	34522 〈79684-RA〉	浄瑠璃　玉藻前三段目	〃	日本大阪	【17-128A】
〔5〕	34520 〈79647-RA〉	浄瑠璃　先代萩御殿（第壹）	豊竹呂昇	日本大阪	【17-130A】
	34521 〈79645-RA〉	浄瑠璃　先代萩御殿（第貳）	〃	日本大阪	【17-130B】
〔6〕	34523 〈79631-RA〉	浄瑠璃　壺阪沢市内之段（第壹）	豊竹呂昇	日本大阪	【17-129A】
	34524 〈81075-RA〉	浄瑠璃　壺阪沢市内之段（第貳）	〃	日本大阪	【17-129B】
〔7〕	34529 〈79685-RA〉	小唄　奴さん	堀江玉吉 小信*	日本大阪	【Z46-09A】
	34530 〈79012-RA〉	小唄　お前まちまち	堀江つま	日本大阪	【Z46-09B】
〔8〕	34531 〈79671-RA〉	小唄　元禄節	堀江つま	日本大阪	【Z46-07A】
	34533 〈79632-RA〉	小唄　わしが国さの山で白ひのが	堀江小信 つま*	日本大阪	【Z46-07B】
〔9〕	34543 〈79722-RA〉	清元　神田祭	立花家喬之助 都家歌吉	日本東京	【17-202A】
	34544 〈79661-RA〉	小唄　年の瀬や	都家歌吉	日本東京	【17-202B】
〔10〕	34555 〈79678-RA〉	浄瑠璃　明烏山名屋之段（第壹）	貴若 豊沢小住	日本大阪	【17-131A】
	34564 〈79711-RA〉	浄瑠璃　明烏山名屋之段（第貳）	〃	日本大阪	【17-131B】
〔11〕	34556 〈79089-RA〉	浄瑠璃　紙屋内之段	貴若 豊沢小住	日本大阪	【17-132B】
	34557 〈79653-RA〉	浄瑠璃　三十三間堂	〃	日本大阪	【17-132A】
〔12〕	34558 〈79091-RA〉	浄瑠璃　お俊伝兵衛堀川之段	貴若 豊沢小住	日本大阪	【17-133A】
	34562 〈79810-RA〉	浄瑠璃　壺阪寺沢市内	〃	日本大阪	【17-133B】
〔13〕	34565 〈79613-RA〉	浄瑠璃　新口村之段（第壹）	貴若 豊沢小住	日本大阪	【17-134A】
	34559 〈79662-RA〉	浄瑠璃　新口村之段（第貳）	〃	日本大阪	【17-134B】

	製品番号〈製造番号〉	曲名	演奏者名	支店名	【整理番号】
〔14〕	34568 〈79661-RA〉	浄瑠璃三味線　阿古屋琴歌（第壹）	豊沢猿次郎 野沢吉作	日本大阪	【17-123A】
	34569 〈79971-RA〉	浄瑠璃三味線　阿古屋琴歌（第貳）	〃	日本大阪	【17-123B】
〔15〕	34570 〈79712-RA〉	浄瑠璃三味線　阿古屋琴歌（第参）	豊沢猿次郎 野沢吉作	日本大阪	【17-124A】
	34567 〈79655-RA〉	浄瑠璃三味線　野崎村之切	〃	日本大阪	【17-124B】
〔16〕	34572 〈79626-RA〉	浄瑠璃三味線　堀川猿廻し（第壹）	豊沢猿次郎 野沢吉作	日本大阪	【17-125A】
	34573 〈79088-RA〉	浄瑠璃三味線　堀川猿廻し（第貳）	〃	日本大阪	【17-125B】
〔17〕	34574 〈79011-RA〉	浄瑠璃三味線　堀川猿廻し（第参）	豊沢猿次郎 野沢吉作	日本大阪	【17-126A】
	34575 〈79761-RA〉	浄瑠璃三味線　堀川猿廻し（第四）	〃	日本大阪	【17-126B】
〔18〕	34606 〈81628-RA〉	小唄　博多節	中村家芳寿	日本東京	【Z46-08A】
	34607 〈81639-RA〉	小唄　磯節	近江家まい子	日本東京	【Z46-08B】
〔19〕	34612 〈81613-RA〉	深川踊 坊さん	笑家一座	日本東京	【17-235A】
	34613 〈81456-RA〉	住吉かつぽれ	〃	日本東京	【17-235B】
〔20〕	34623 〈81583-RA〉	筑前琵琶　川中島（第壹）	高峰筑風	日本東京	【17-181A】
	34624 〈81460-RA〉	筑前琵琶　川中島（第貳）	〃	日本東京	【17-181B】
〔21〕	34626 〈83859-ER〉	長唄　新浦島（第壹）	杵屋千代 杵屋栄子	日本東京	【17-216A】
	34627 〈83861-ER〉	長唄　新浦島（第貳）	〃	日本東京	【17-216B】
〔22〕	34628 〈83858-ER〉	長唄　新浦島（第参）	杵屋千代 杵屋栄子	日本東京	【17-217A】
	34629 〈83863-ER〉	長唄　新浦島（第四）	〃	日本東京	【17-217B】
〔23〕	34630 〈84412-ER〉	長唄　新浦島（第五）	杵屋千代 杵屋栄子	日本東京	【17-218A】
	34631 〈83961-ER〉	長唄　新浦島（第六）	〃	日本東京	【17-218B】
〔24〕	34632 〈84373-ER〉	長唄　寒行雪ノ姿見	杵屋喜三郎 杵屋六左衛門	日本東京	【17-220A】
	34633 〈83860-ER〉	長唄　筑摩川	〃	日本東京	【17-220B】
〔25〕	34634 〈81636-RA〉	長唄　越後獅子（其壱）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-213A】
	34635 〈81466-RA〉	長唄　越後獅子（其貳）	〃	日本東京	【17-213B】

	製品番号〈製造番号〉	曲名	演奏者名	支店名	【整理番号】
〔26〕	34636 〈82993-ER〉	長唄　越後獅子（其三）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-214A】
	34637 〈81559-RA〉	長唄　越後獅子（其四）	〃	日本東京	【17-214B】
〔27〕	34638 〈81450-RA〉	長唄　越後獅子（其五）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-215A】
	34639 〈81649-RA〉	長唄　越後獅子（其六）	〃	日本東京	【17-215B】
〔28〕	34640 〈81520-RA〉	長唄　吉原雀（其壱）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-226A】
	34641 〈81615-RA〉	長唄　吉原雀（其貳）＊	〃	日本東京	【17-226B】
〔28〕'	34640 〈81520-RA〉	長唄　吉原雀（其壱）	〃	日本東京	【17-229A】
	34641 〈81615-RA〉	長唄　吉原雀（其貳）＊	〃	日本東京	【17-229B】
〔29〕	34642 〈85077-ER〉	長唄　吉原雀（其三）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	———	【17-227A】
	34643 〈81543-RA〉	長唄　綱館（其壱）＊	長唄　芳村伊十郎＊ 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-227B】
〔30〕	34644 〈82514-ER〉	長唄　吉原雀（其五）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-228A】
	34645 〈81630-RA〉	長唄　吉原雀（其六）	〃	———	【17-228B】

	製品番号〈製造番号〉	曲名	演奏者名	支店名	【整理番号】
〔31〕	34646 〈81638-RA〉	長唄　松のみどり（其壱）	長唄　岡安南甫 三絃　杵屋六左衛門	日本東京	【17-225A】
	34647 〈84199-ER〉	長唄　松のみどり（其貳）	〃	―――	【17-225B】
〔32〕	34648 〈81542-RA〉	長唄　綱館（其壱）	長唄　芳村伊十郎 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	―――	【17-221A】
	34649 〈81626-RA〉	長唄　綱館（其貳）	〃	日本東京	【17-221B】
〔33〕	34650 〈81521-RA〉	長唄　綱館（其壱）*	長唄　芳村伊十郎 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-222A】
	34651 〈82178-ER〉	長唄　綱館（其四）	〃	日本東京	【17-222B】
〔34〕	34652 〈82412-ER〉	長唄　綱館（其五）	長唄　芳村伊十郎 三絃　杵屋六左衛門 上調子　杵屋勘五郎 笛　望月太喜蔵 小鼓　望月太左衛門 大鼓　望月長左久 太鼓　田中伝左衛門	日本東京	【17-223A】
	34653 〈81578-RA〉	長唄　綱館（其六）	〃	日本東京	【17-223B】
〔35〕	34658 〈81527-RA〉	浄瑠璃　三勝半七酉屋之段（第壹）	竹本錣太夫 竹沢団六	日本東京	【17-122A】
	34659 〈81610-RA〉	浄瑠璃　三勝半七酒屋之段（第貳）	〃	日本東京	【17-122B】
〔36〕	34662 〈81605-RA〉	尺八　野崎村	一睡軒花堂	日本東京	【17-166A】
	34663 〈81616-RA〉	尺八　米山甚句	〃	日本東京	【17-166B】
〔37〕	34665 〈84985-ER〉	浄瑠璃　菅原寺子屋之段（第壹）	竹本錣太夫 竹沢団六	日本東京	【17-121A】
	34666 〈84971-ER〉	浄瑠璃　菅原寺子屋之段（第貳）	〃	日本東京	【17-121B】
〔38〕	34672 〈81467-RA〉	新内　白木屋	富士松加賀太夫 吾妻路宮古*	日本東京	【17-191A】
	34673 〈81637-RA〉	新内　三勝半七	〃	日本東京	【17-191B】
〔39〕	34676 〈84970-ER〉	新内　夕霧（第壹）	富士松加賀太夫 吾妻路宮古*	日本東京	【17-192A】
	34677 〈81638-RA〉	新内　夕霧（第貳）	〃	日本東京	【17-192B】

[Summary]

Disque Pathé, Records Requiring a Special Player

IJIMA Mitsuru
NAGAI Miwako

It was in 1911 that the French recording company Pathé made a recording in Japan. Each one of the recordings of Japanese music made at the beginning of the 20th century is valuable.

The microgroove of the records made by Pathé is vertical. Majority of the microgroove of records was lateral and only a few companies produced records with vertical microgroove. Even today, a special player is required to play records with vertical microgroove.

It seems that Pathé withdrew from the market in Japan in as little as 10 years or so. Already by the 1930s Japanese records produced by Pathé had become so few as to be treasured. The number of records by Pathé that exist today seems to be even fewer although the exact number has not yet been investigated.

The National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo has a collection of 40 records (39 works) recorded in 1911 by Pathé. They are all 11 inch, two-sided discs. This is thought to be the greatest number of pre-War records owned by any public organization.

Playing time of a Pathé record is about 3 minutes per side and the quality of recording is very good in many cases, given the technical standard of the times. It appears that *nagauta* by OKAYASU Nampo VIII (1874-1915) remains only on Pathé records. Among the many recordings of *nagauta* by YOSHIMURA Ijuro VI (1858-1935), that of *Tsunayakata* performed to the accompaniment of shamisen by KINEYA Rokuzaemon (1870-1940) is rare. In such ways, the contents of recordings on records made in 1911 by Pathé are also highly valuable.

東京文化財研究所蔵フランス・パテー 34522「玉藻前三段目」レーベル部分

(see p.75)

東京文化財研究所蔵フランス・パテー 34522「玉藻前三段目」

撮影：コウ写真工房

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage
Number 6
2012

Publisher:
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告　第6号
平成24年3月26日印刷
平成24年3月29日発行

編　　集　独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員　無形文化遺産部長　宮田繁幸
無形文化財研究室長　高桑いづみ
音声・映像記録研究室長　飯島満

発　　行　独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713　東京都台東区上野公園13-43
電話　03（3823）2241

© 独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所　2012

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo